

多賀城市内の遺跡1

—西沢遺跡第2次調査の概報—

平成29年3月

多賀城市教育委員会

序 文

多賀城市内には特別史跡多賀城跡附寺跡や、多くの埋蔵文化財包蔵地があり、それらは市域の約4分の1にも及んでおります。これら貴重な「文化遺産」を後世に伝えていくことは我々の重要な責務であり、当教育委員会としても開発事業との円滑な調整を図りつつ、国民共有の歴史的財産である埋蔵文化財を適切の保護し、活用に努めているところです。

さて、本書は平成6年度に実施した西沢遺跡第2次調査の概報であります。当該調査区は多賀城跡東側の沢を一つ隔てた緩斜面上に位置し、古代の竪穴住居跡や規則的に配置された掘立柱建物跡のほか、30棟を超す掘立柱建物跡からなる中世の屋敷跡が発見されました。

今回は、調査成果の一部を概略的に御報告するものであります。多賀城跡に密接に関わる古代の建物群や、中世の大規模な屋敷跡の発見は、本市の古代・中世史を考えるうえで貴重な成果となりました。

最後になりましたが、発掘調査に際し、御理解と御協力をいただきました地権者の皆様をはじめ関係各位に対し、心より感謝申し上げます。

平成29年3月

多賀城市教育委員会

教育長 小畠幸彦

例　言

- 1 本書は、平成6年度に受託事業として実施した西沢遺跡第2次調査の概要を記したものである。
- 2 遺構の名称は、第1次調査からの通し番号である。
- 3 測量法の改正により、平成14年4月1日から経緯度の基準は日本測地系に代わり世界測地系に従うこととなった。一方、東日本大震災による地盤変動により、本市域は東に約3m、南に約1m移動したとされているが、当該区の変動値が不明であることから、挿図中の基準線は調査時に設定したもの（S N 00、E W 00）を使用した。なお、震災前の世界測地系に当てはめると、S N 00、E W 00は以下のとおりである。
S N 00 : X = -187.851.168、E W 00 : Y = 14.087.879（いずれも平面直角座標系10系）
- 4 挿図中の高さについては標高地を示しているが、本市では震災後に30cm前後の沈下が認められることから、震災前の標高地を提示している。
- 5 土色は「新版標準土色帖」（小山・竹原）を参考にした。
- 6 本書は、調査員全員の協議のもと、武田健市が執筆・編集を行った。遺物の写真撮影は村上詩乃・茂泉光雄が担当した。
- 7 調査に関する諸記録及び出土遺物はすべて多賀城市教育委員会が保管している。また、現地説明会及び遺跡報告会で一部成果について資料発表しているが、内容が異なる場合は本書が優先する。

調査要綱

- 1 調査主体 多賀城市教育委員会 教育長 櫻井 茂男
- 2 調査担当 多賀城市埋蔵文化財調査センター 所長 烏山 文夫
- 3 調査担当者 多賀城市埋蔵文化財調査センター 研究員 石本 敬 技師 武田健市
調査員 伊藤 浩
- 4 所在地 多賀城市浮島字西沢 70、71、74、76番
- 5 調査期間 平成6年4月25日～12月21日
- 6 調査面積 3,735m²

目　次

1 遺跡の地理的・歴史的環境	2
2 調査に至る経緯と経過の概要	2
3 調査成果	3
4 まとめ	24

凡 例

1 本書で使用した遺構の略称は、次のとおりである。

S B : 堀立柱建物跡 S I : 橫穴住居跡 S D : 溝跡 S K : 土壌 P i t : 柱穴及び小穴
S X : その他の遺構

2 奈良・平安時代の土器の分類記号は下記のとおりである。詳細は『市川橋遺跡一城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書II』(多賀城市教育委員会 2003) で報告している。

(1) 土師器壺

A類：ロクロ調整を行わないもの

B類：ロクロ調整を行ったもの

B I 類：ロクロからの切り離し後、回転ヘラケズリされたもの

B II 類：ロクロからの切り離し後、手持ちヘラケズリされたもの

B III 類：ロクロからの切り離しがヘラ切りで、再調整されないもの

B IV 類：ロクロからの切り離しが静止糸切りで、再調整されないもの

B V 類：ロクロからの切り離しが回転糸切りで、再調整されないもの

B I・B II 類では、ロクロからの切り離しが識別できる資料があり、ヘラ切りによるものを a、静止糸切りによるものを b、回転糸切り（糸切り）によるものを c として細分する。

(2) 土師器甕

A類：ロクロ調整を行わないもの

B類：ロクロ調整を行ったもの

(3) 須恵器壺

I 類：ロクロからの切り離し後、回転ヘラケズリされたもの

II 類：ロクロからの切り離し後、手持ちヘラケズリされたもの

III 類：ロクロからの切り離しがヘラ切りで、再調整されないもの

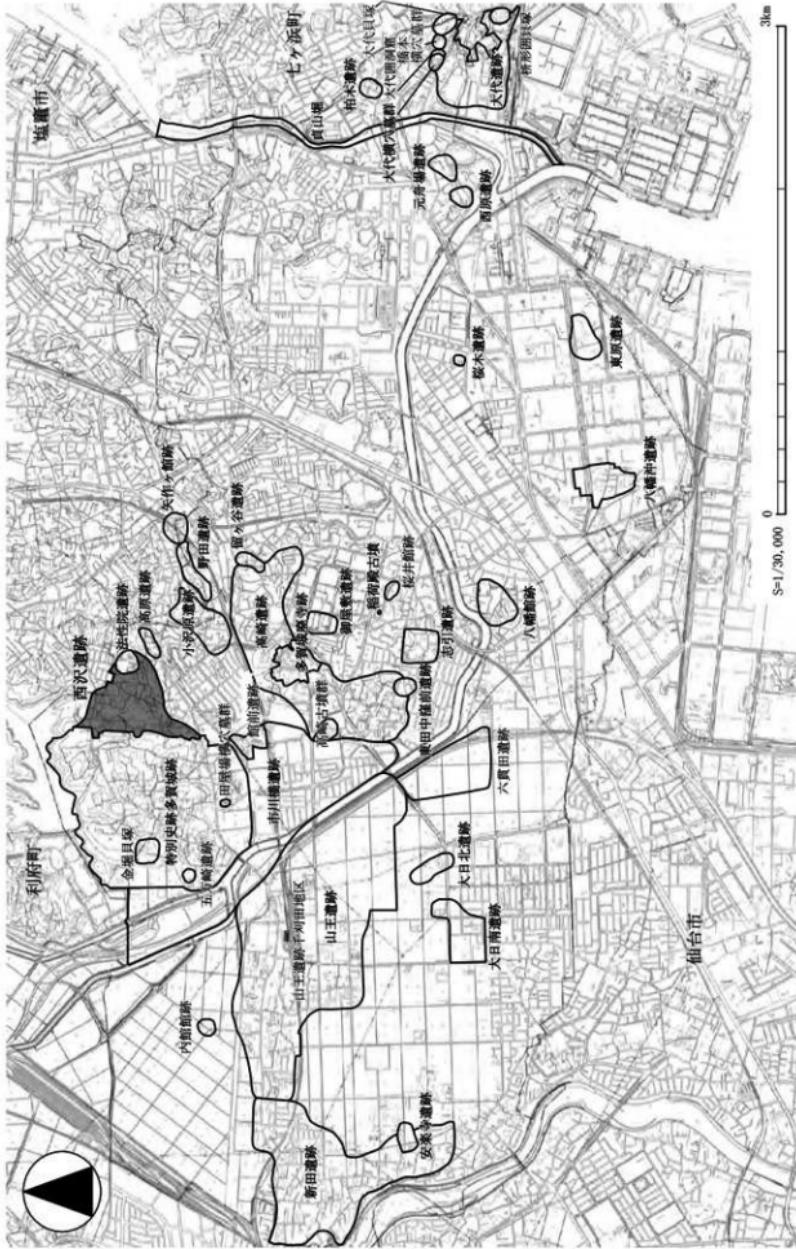
IV 類：ロクロからの切り離しが静止糸切りで、再調整されないもの

V 類：ロクロからの切り離しが回転糸切りで、再調整されないもの

I・II 類では、ロクロからの切り離しが識別できる資料があり、ヘラ切りによるものを a、静止糸切りによるものを b、回転糸切り（糸切り）によるものを c として細分する。

3 瓦の分類は「多賀城跡 政庁跡 図録編」(宮城県多賀城跡調査研究所 1980)、「多賀城跡 政庁跡 本文編」(宮城県多賀城跡調査研究所 1982) の分類基準に従った。

4 本文中の「灰白色火山灰」の年代については、伐採年代が907年とされた秋田県払田柵跡外郭線C期存続中に降灰し、承平4年(934年)閏正月15日に焼失した陸奥国分寺七重塔の焼土層に覆われていることから、907～934年の間とする考え方と、『扶桑略記』延喜15年(915年)7月13日条にある「出羽国言上雨灰高二寸諸郷桑枯損之由」の記事に結びつけ915年とする考え方がある(町田洋「火山灰とテフラ」『日本第四紀地図』1987、阿子島功・壇原徹「東北地方、10 C頃の降下火山灰について」『中山久夫教授退官記念地質学論文集』1991)。本書ではこれらの研究成果を基に、灰白色火山灰を10世紀前葉に降下したものとする。



第1図 多賀城市内の遺跡

1 遺跡の地理的・歴史的環境

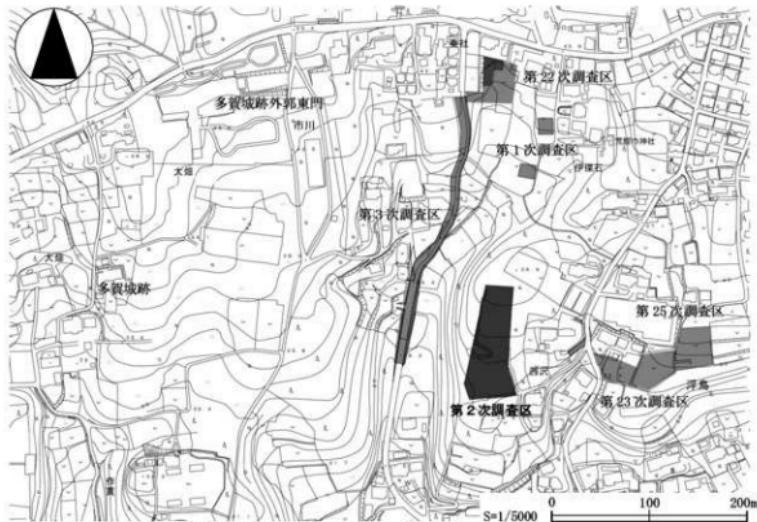
本遺跡は市北部の市川・浮島地区に所在している。地形的には松島丘陵から塩釜方面に向かって張り出した低丘陵上南西端部にあたり、東西 450 m、南北 750 m の範囲を占めている。標高は北側丘陵尾根付近が 46 m と最も高く、南側沖積地と接する付近では 6 m となっている。遺跡内の標高差は 40 m に達し、全体的には北から南に向かって低くなる斜面の合間に、大小の沢地形が複雑に入り込んだ景観を呈している。今回の調査区は遺跡中央部にある標高 28 ~ 36 m の緩斜面上にあり、本遺跡内では最も広い平坦地となっている。

さて、本遺跡では平成 28 年度までに 29 次に及ぶ発掘調査を実施しており、平安時代を中心に数多くの遺構・遺物を発見している。なかでも、平成 7 年度に実施した第3次調査では平安時代の堅穴住居を多数発見したほか、沢地に近接した場所には鍛冶工房が設けられていたことが明らかとなった。多賀城跡東側に近接した場所での発見であり、関連性が注目される。

2 調査に至る経緯と経過の概要

本件は、宅地造成計画に伴う発掘調査である。平成 1 年 1 月、地権者より当該区の造成計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出され、これを受けて平成 6 年 4 月 25 日より記録保存の本発掘調査に着手したものである。

対象面積 6,182 m² のうち、遺構が確認された範囲が約 3,700 m² と広大であることに加え、精査の結果、一辺 9 m にも達する大規模な堅穴住居跡や古代の掘立柱建物群、整然と配置された中世の建物群など、各時代をみても特筆すべき遺構が数多く確認されたことから、8か月の長期間の調査となった。この



第2図 調査区位置図

間、記録的な雨量となった「平成6年9月洪水」にみまわれるなどしたが、10月8日には現地説明会を開催し、発見した遺跡の状況を一般公開した。11月7日から盛土造成となる南半部の表土掘削を開始し、S B 164掘立柱建物跡などを発見した。12月21日、調査器材の撤収をもって現地調査の一切を終了した。

3 調査成果

今回の調査では、現代の表土下で明黄褐色土や褐色土、にぶい黄褐色粘土などが主体となる粘質土が確認され、これら上面で竪穴住居跡や掘立柱建物跡、溝跡、土壌など多数の遺構を発見した。以下、主な遺構について概要を記載する。

S I 144 竪穴住居跡（第5図）

【位置】調査区中央部、N 03～S 03、E 03～E 09付近で発見した。

【残存状況】S I 141への拡幅時に上面の大半が破壊され、南辺がすべて滅失しているなど、残存状況は悪い。

【重複】S I 141と重複し、それよりも古い。

【平面形・方向】平面形は方形であり、方向は北辺で測ると西で約1度南に偏している。

【規模】東西約5.9m、南北約8mである。

【壁の状況】住居の壁は残存していない。

【床面の状況】S I 141構築時に破壊されている可能性が高く、残存する掘方整地土上面が床面であるか否か定かではない。整地土の厚さは2～6cmであり、褐色土(10YR4/4)及びにぶい黄褐色土(10YR5/4)である。

【主柱穴】対角線上で4基確認している（主柱穴1～4）。柱はすべて抜き取られているが、主柱穴2・3では柱のあたり痕跡が確認できる。掘方の平面形は方形を基調としており、規模は主柱穴3で測ると長径65cm、短径50cmである。柱抜取り穴はいずれも柱穴中心部にあり、埋土は明黄褐色土(10YR6/6)や灰黄褐色土(10YR)が多く混入する褐色土(7.5YR4/4)またはにぶい黄褐色土(10YR4/3)が主体である。

【カマド】北辺中央部に付設されている。残存するのは燃焼部の窪みのみであり、規模は不明である。

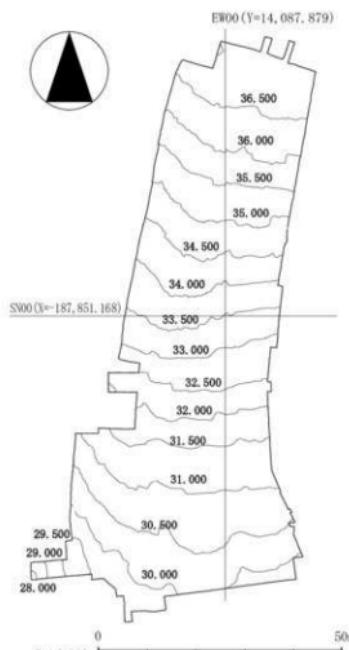
【周溝】残存する西・北・東辺で確認した。規模は幅15～30cm、深さは北辺で約10cmである。

【遺物】出土していない。

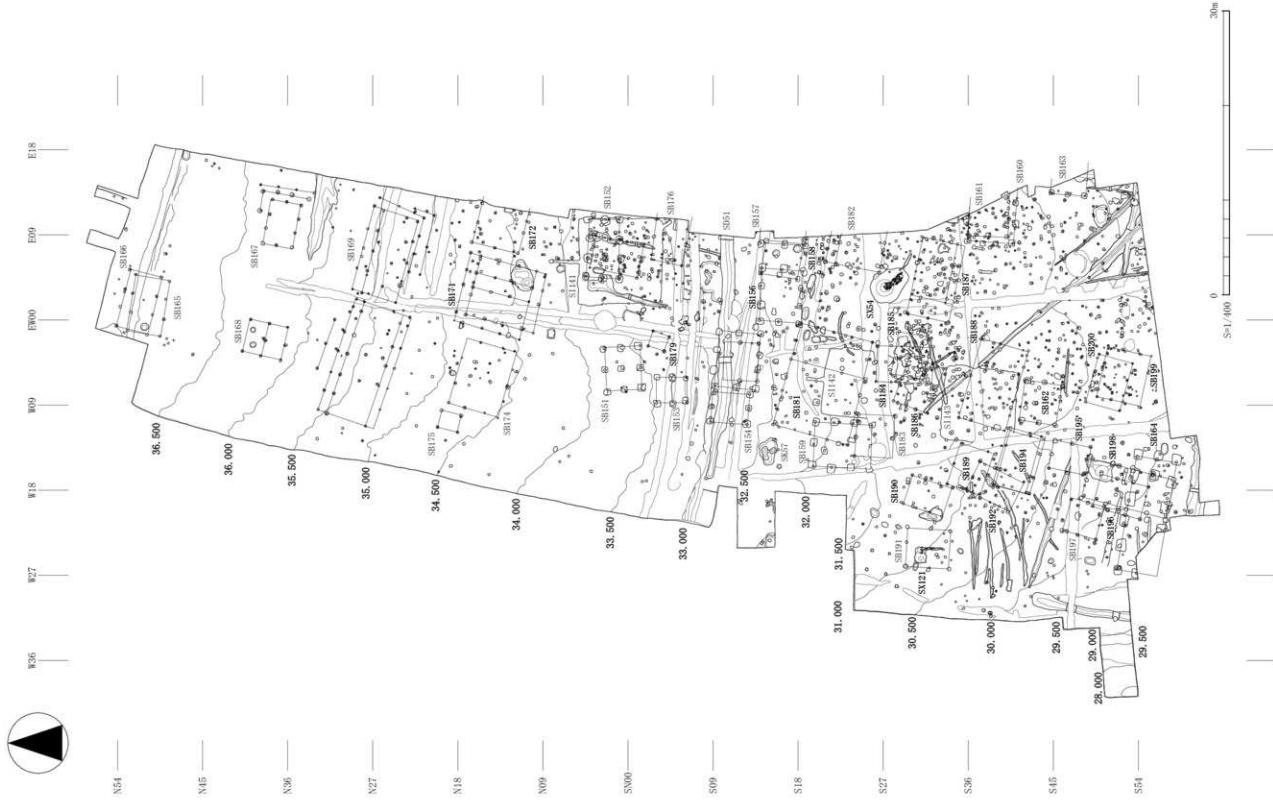
S I 141 竪穴住居跡（第6図）

【位置】調査区中央部、S N 00～N 09、E W 00～E 09付近で発見した。

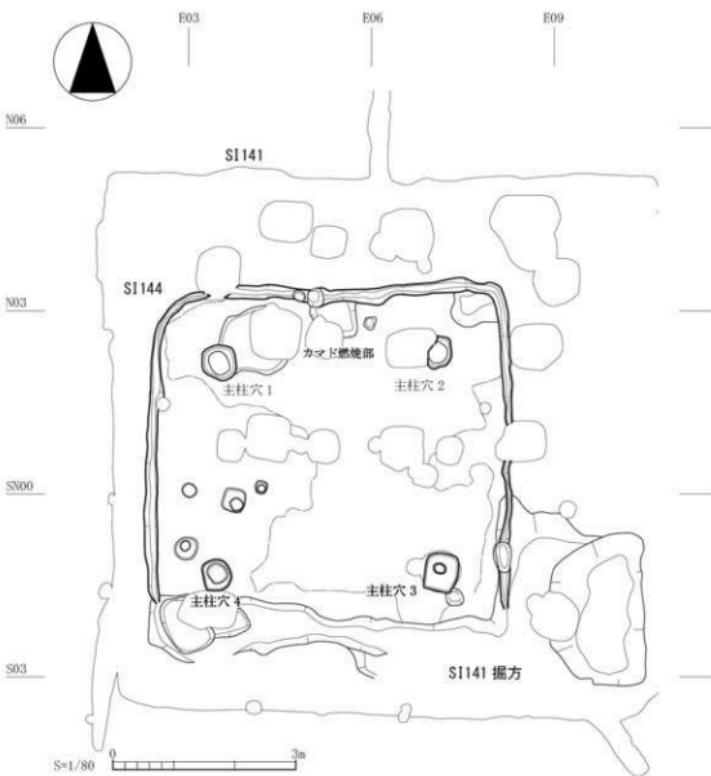
【残存状況】全体的に後世の削平を受けており、残存状況は悪い。



第3図 発掘基準線及び標高地



第4図 調査区全体図



第5図 S I 144 平面・断面図

【重複】S I 144、S B 152・176・177、S X 79・226と重複し、S I 144よりも新しく、それ以外のものよりも古い。

【変遷】2時期の変遷(A→B期)がある。B期に造り替える際に南辺で15~40cmほど拡張しているものの、それ以外は床の嵩上げが確認されるのみである。

【平面形・方向】平面形は方形であり、方向は北辺で測るとおよそ東西の発掘基準線と一致する。

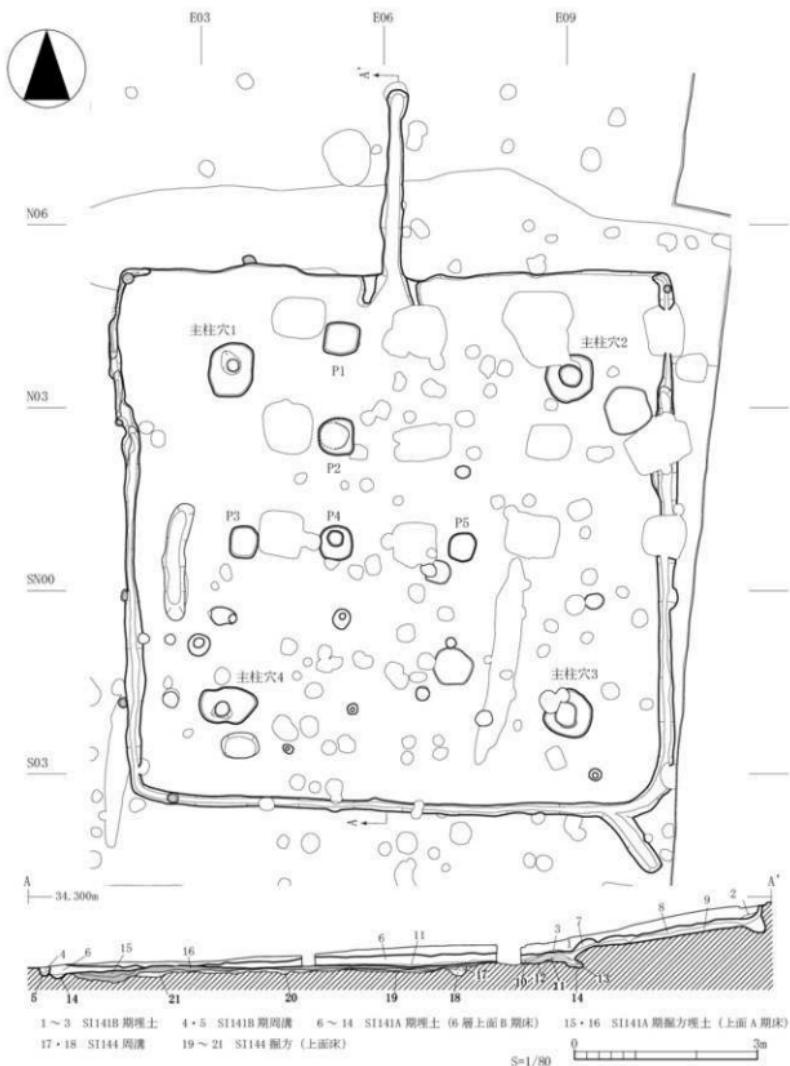
【規模】東西約9.2m、南北約8.9mである。

【壁の状況】地山を壁としている。およそ垂直に立ち上がっており、残存する壁高は北辺で40~50cmである。

【床面の状況】A期床はS I 144を拡幅した後の堀方整地土上面であり、厚さは約10cmである。埋土はにぶい黄褐色土(10YR5/4)が主体であり、黒褐色土(10YR3/1)や褐色土(7.5YR4/2)が多く混入している。B期床は同位置で嵩上げしたものであり、厚さは約20cmである。5層に細分できるが、いずれも黒褐色土(10YR3/2、7.5YR3/1・3/2)が主体である。

【主柱穴】B期対角線上で4基確認している(主柱穴1~4)。A期のものは未検出であることから、B期

とおよそ同位置にあったものと推測される。主柱穴1・4で柱痕跡、主柱穴2・3で柱抜取り穴を確認した。掘方の平面形はおよそ方形を基調としており、規模は主柱穴1で測ると長径約90cm、短径約70cmである。柱痕跡は直径約20cmであり、埋土は粘性のある暗褐色土(10YR3/2)である。柱抜取り穴はいずれも柱穴



第6図 S I 141平面・断面図

の中央部に認められる。埋土は黒褐色土（10YR3/2）または褐色土（10YR4/4）が主体であり、にぶい黄橙色土（10YR7/2）やにぶい黄褐色土（10YR4/3）が多く混入している。

【カマド】北辺中央部に付設されており、A・B期とともに同一のカマドを使用している。規模は燃焼部最大幅70cm、奥行き60cm、残存する壁高は約20cmである。住居北側には煙道が設けられており、住居外に向かって緩やかに上がっており。規模は長さ約3m、最大幅約40cmである。

【周溝】A期では、南辺以外に明確に周溝と認められる痕跡は確認していない。B期では北辺を除く3辺で確認した。規模は幅20～30cm、深さは西辺中央付近で25cmであり、住居外壁側では中位付近で外側に抉れている箇所が認められる。また、南東端部には住居外側に向かって延びる外延溝が設けられている。

【壁柱穴】周溝底面で、壁柱穴かと考えられる小規模なビットを7基確認している。

【住居内埋土】黒褐色土（7.5YR3/2）が主体であり、にぶい黄褐色土（10YR5/4）や褐色土（10YR4/4）が斑状に混入している。カマド周辺や煙道部には焼土が混入しており、カマド上部では特に多く認められる。厚さは住居内が約10cm、煙道部で約20cmである。

【遺物】B期床上面より土師器壺（A類）、須恵器壺、住居内埋土から土師器壺（A類）、須恵器壺（IIa類）、稜椀が出土している。

【その他】B期北西部にT字に配置された柱穴が認められる（P1～5）。東西2間、南北2間分あり、柱間は東西方向のものが西から約1.5m、約2.0m、南北方向のものが南から約1.7m、約1.6mである。柱穴の規模はいずれも主柱穴に比べ小規模であり、P4で測ると一边約50cmである。

S I 142 穴穴住居跡（第7図）

【位置】調査区南部、S18～27、E W00～W09付近で発見した。

【残存状況】全体的に後世の削平を受けており、南東部が滅失しているなど残存状況は悪い。

【重複】SB181・183と重複し、それらよりも古い。

【平面形・方向】平面形は東西に長い方形であり、方向は北辺で測ると西で約8度北に偏している。

【規模】東西約7m、南北約5mである。

【壁の状況】地山を壁としている。およそ垂直に立ち上がっており、残存する壁高は北辺で約30cmである。

【床面の状況】掘方埋土上面が床であるが、一部地山をそのまま床としている箇所もある。埋土の厚さは約4～15cmであり、黒褐色土（10YR4/2）や黄褐色土（10YR5/6）が多量に混入する灰黄褐色土（10YR4/2）である。

【柱穴】対角線上で4基確認している（主柱穴1～4）。主柱穴1・4で柱痕跡、主柱穴2・3で柱抜取り穴を確認した。掘方の平面形は不整形であり、規模は主柱穴1で測ると長径約90cm、短径約70cmである。柱痕跡は直径18cmであり、埋土は粘性のある褐色土（10YR4/4）である。柱抜取り穴は柱穴を大きく壊しており、埋土はにぶい黄褐色土（10YR4/3）である。

【カマド】北辺中央部に付設されている。規模は燃焼部最大幅75cm、奥行き60cm、残存する壁高は約20cmである。住居北側には煙道が設けられている。住居外に向かって緩やかに上がっており、先端部には直径約40cm、深さ40cmの煙出しビットが確認できる。煙道の規模は長さ1.8m、最大幅45cmである。

【周溝】4辺すべてで確認した。規模は幅20～40cm、深さは西辺北側で15cmであり、住居外壁側では中位付近で外側に抉れている箇所が認められる。また、北辺東側から東辺にわたり、周溝内に瓦が敷設されている。

【住居内埋土】黒褐色土（10VR3/2）が主体であり、にぶい黄褐色土（10YR5/4）が斑状に混入している。カマド周辺や煙道部には焼土が混入しており、カマド上部では特に多く認められる。厚さは住居内が10～20cm、煙道部で5～10cmである。

【遺物】周溝に敷設された平瓦（IA・II B a・II B b類）、丸瓦（II・II b類）のほか、周溝から須恵器坏（III類）、住居内埋土から土師器坏（B II類）、甕（B類）、須恵器杯（II・V類）が出土している。このうち、平瓦・丸瓦には「田」「物」「占」の刻印が認められるものもある。

S I 143 竪穴住居跡（第8図）

【位置】調査区南部、S 33～42、W 06～W 12付近で発見した。

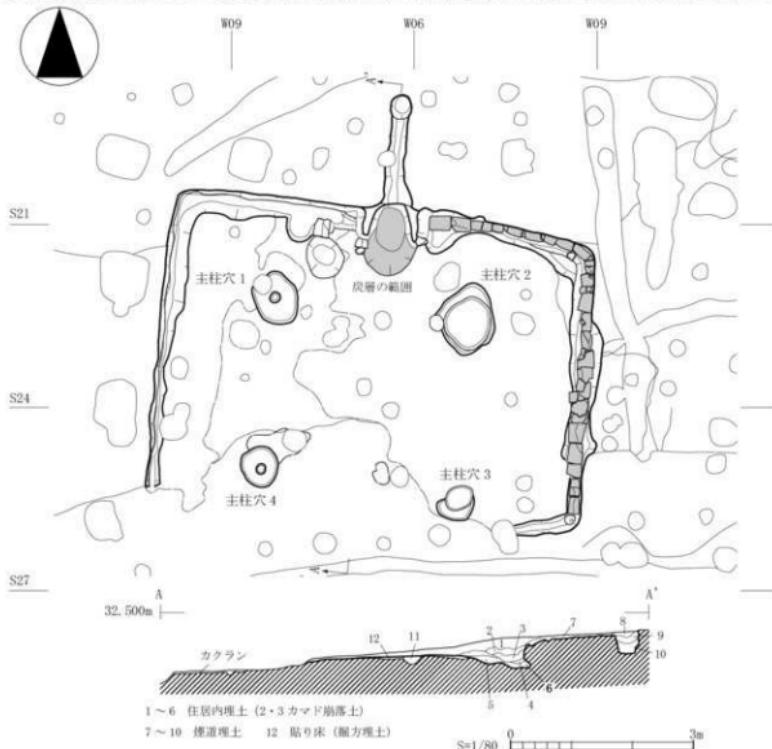
【残存状況】全体的に後世の削平を受けており、中央部及び南東部が滅失しているなど残存状況は悪い。

【重複】SB 188・193・194、SD 76・78と重複し、それらよりも古い。

【平面形・方向】平面形は方形であり、方向は北辺で測ると西で約6度北に偏している。

【規模】東西約7.8m、南北約8mである。

【壁の状況】地山を壁としている。北東部で僅かに残存する壁面を見ると、およそ垂直に立ち上がっている。



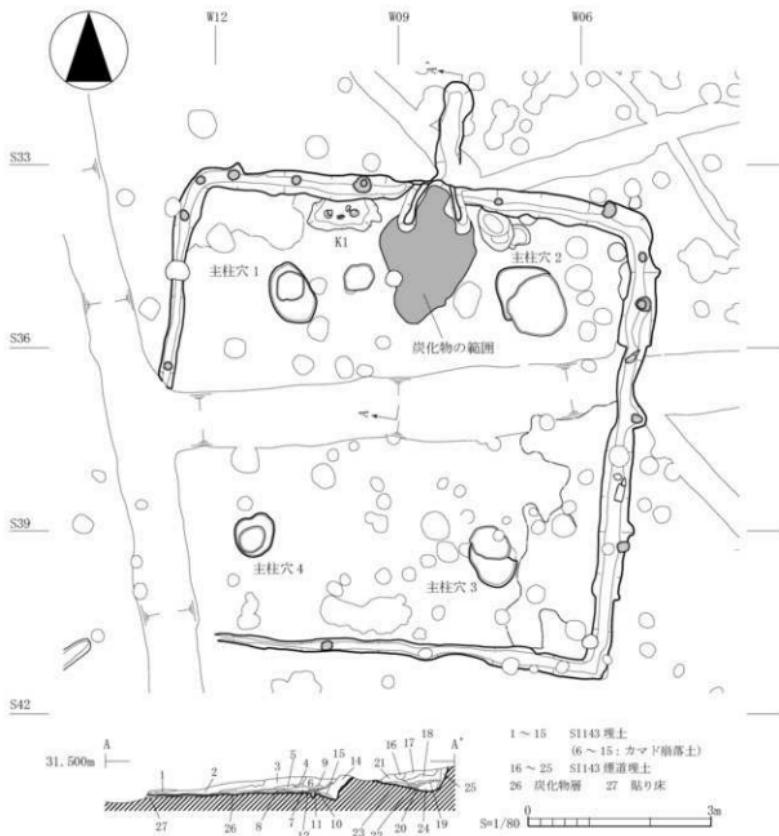
第7図 S I 142 平面・断面図

残存する壁高は最大 25cm である。

【床面の状況】掘方整地土上面が床であるが、一部地山をそのまま床としている箇所もある。厚さは約 2 ~ 6 cm であり、地山に近い明褐色土 (7.5YR5/8) である。

【主柱穴】対角線上で 4 基確認している (主柱穴 1 ~ 4)。柱はすべて抜き取られており、主柱穴 1 で僅かに柱のあたり痕跡を確認した。掘方の平面形は不整形であり、規模は主柱穴 1 で測ると長径約 100cm、短径約 70cm である。柱抜取り穴は柱穴を大きく壊しており、埋土は褐色土 (10YR4/4・4/6) や灰黄褐色土 (10YR4/2) が主体である。

【カマド】北辺中央部に付設されている。規模は燃焼部最大幅 80cm、奥行き 90 cm、残存する壁高は約 20cm である。住居北側には煙道が設けられており、外側に向かって緩やかに下っている。煙道の規模は長さ 1.7 m、最大幅 65cm である。



第 8 図 S I 143 平面・断面図

【周溝】4辺すべてで確認した。規模は幅20～50cm、深さは東辺で約20cmである。

【壁柱穴】周溝底面で壁柱穴の痕跡を14基確認した。いずれも小規模なものであるが、直径約10cmの柱痕跡が確認できるものもある。

【住居内埋土】黄褐色砂質土(10YR5/6)やにぶい黄褐色土(10YR4/3)が主体である。カマド周辺や煙道部には焼土が混入しており、カマド上部では特に多く認められる。厚さは住居内が10～20cm、煙道部で6～25cmである。

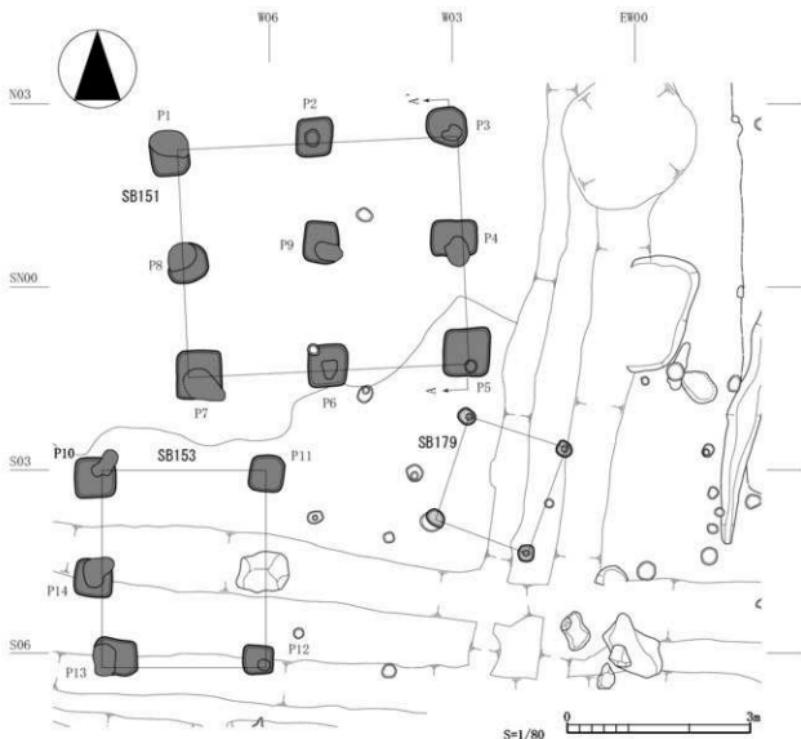
【遺物】主柱穴掘方から土師器壺(BII類)、須恵器甕、土壤(K4)から土師器壺(BV類)、周溝から土師器壺(BII類)、住居内埋土から土師器甕(A・B類)、須恵器杯(III・V類)、平瓦(IA・IIB類)が出土している。

S B 151 挖立柱建物跡 (第9・10図)

【位置】調査区中央部、N 03～S 03、W 03～09付近で発見した

【桁行・梁行】桁行2間、梁行2間の東西棟連続柱建物跡である。

【柱痕跡・抜取り穴の有無】柱穴は9基(P1～9)検出しており、P2・3・5・6で柱痕跡、他の柱穴で柱抜取り穴を確認した。



第9図 SB151・153・179 平面図

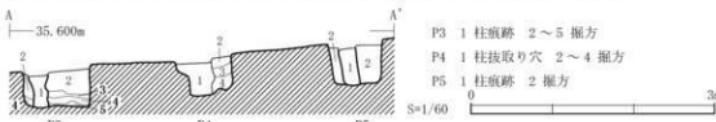
【重複】なし

【方向・規模】方向は梁行（東側柱列）で測ると北で約4度西に偏している。建物の規模は桁行が北側柱列で総長約4.6m、柱間は西から約2.3m、2.34mである。梁行は東側柱列で総長3.8m、柱間は北から1.84m、1.96mである。

【掘方】平面形は方形を基調とし、規模は南東隅柱穴（P5）で測ると、1辺80cm、深さ40cmである。埋土はにぶい黄褐色土（10YR4/3）、暗褐色土（10TR3/3）などが主体であり、浅黄色の粘質土や黄褐色土がブロック状に混入している。

【柱痕跡】直径18～22cmの円形である。埋土は粘性のあるにぶい黄褐色（10YR4/3）及び暗褐色土（10YR3/3）であり、炭化物や粘質土粒が若干混入している。

【柱抜取り穴】柱穴の北側から掘り込まれているものと（P1・8）、南側から掘り込まれるもの（P4・7・9）がある。埋土は浅黄色粘質土がブロック状に混入する暗褐色土（10YR3/3）である。



第10図 SB151 断面図

S B 153 堀立柱建物跡（第9図）

【位置】調査区中央部、S 03～06、E 06～09付近で発見した。

【桁行・梁行】桁行2間、梁行1間の南北棟建物跡である。

【柱痕跡・抜取り穴の有無】柱穴は5基（P10～14）検出しており、このうちP11を除く4基の柱穴で柱抜取り穴を確認した。

【重複】なし

【方向・規模】方向は桁行（西側柱列）で測ると、およそ南北の発掘基準線と一致している。建物の規模は桁行が西側柱列で総長約3m、柱間は北から約1.6m、約1.4mである。梁行は北側柱列で約2.8mである。

【掘方】平面形は方形を基調とし、規模は北西隅柱穴（P10）で測ると、長辺75cm、短辺65cm、深さ50cmである。埋土は黒褐色土（10YR3/2）や灰黄褐色土（10YR4/2）、褐色土（10YR4/4）が主体であり、浅黄色粘質土が斑状に混入している。

【柱抜取り穴】西側柱列がすべて抜き取られている。

S B 152 堀立柱建物跡（第11図）

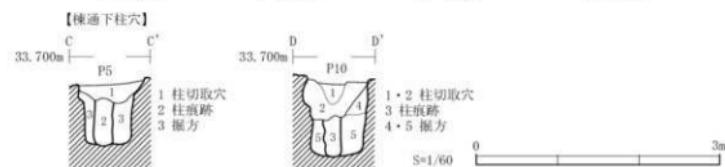
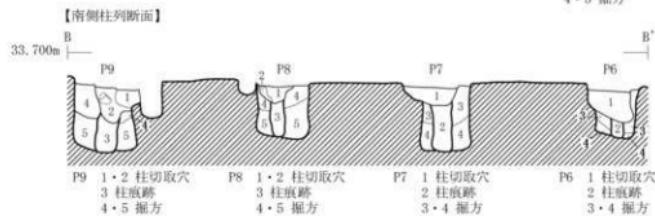
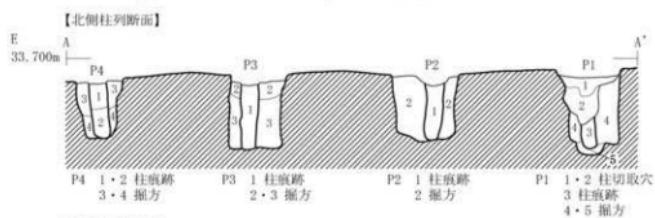
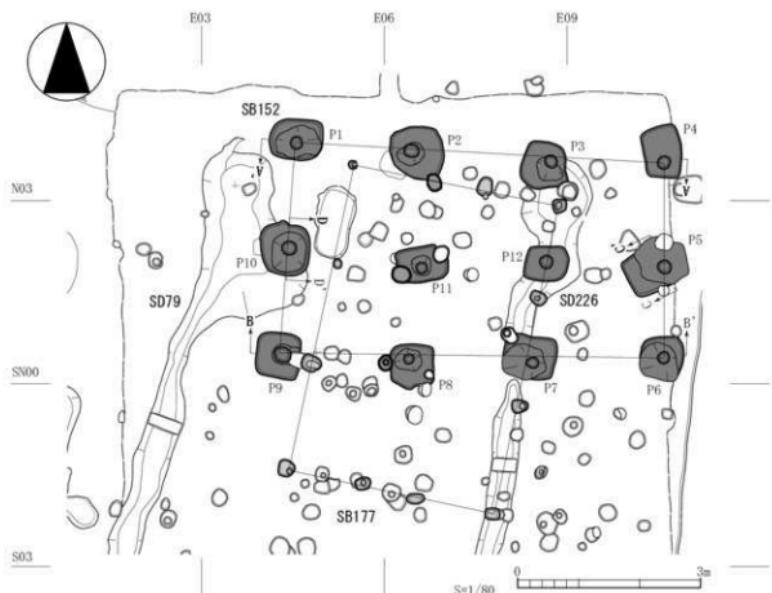
【位置】調査区中央部、N 06～SN 00、EW 00～E12付近で発見した。

【桁行・梁行】桁行3間、梁行2間の東西棟総柱建物跡である。

【柱痕跡・抜取り穴の有無】柱穴は12基（P1～12）検出しており、すべての柱穴で柱痕跡を確認した。

【重複】S I 141、S B 176・175、S X 79・226と重複しており、S I 141よりも新しく、それ以外のものよりも古い。

【方向・規模】方向は桁行（北側柱列）で測ると西で3度12分北に偏している。建物の規模は桁行が北側柱列で総長6.04m、柱間は西から1.90m、2.28m、1.86mである。梁行は西側柱列で総長3.48m、柱



第 11 図 SB152 平面・断面図

間は北から 1.72 m、1.76 m である。

【掘方】平面形は方形を基調とし、規模は北西隅柱穴（P 1）で測ると、長辺 85 cm、短辺 65 cm、深さ 110 cm である。埋土は黒褐色土（10YR3/2）、暗褐色（10YR3/3）、にぶい黄褐色（10YR4/3）が主体であり、褐色土（10YR4/4）やにぶい黄橙色土（10YR7/2）が多く混入している。

【柱痕跡】直径 18 ~ 24 cm の円形である。北東隅柱（P 4）を除きすべて切取穴を伴うが、比較的大く掘り込まれた切取穴が確認されるものが多い（P 1・5・6～10）。埋土は黒褐色土（10YR3/2）である。

S B 154 堀立柱建物跡（第 12 図）

【位置】調査区中央部、S 09 ~ 12、W 06 ~ 12 付近で発見した。

【桁行・梁行】南北 1 間、東西 2 間の南北棟建物跡である。

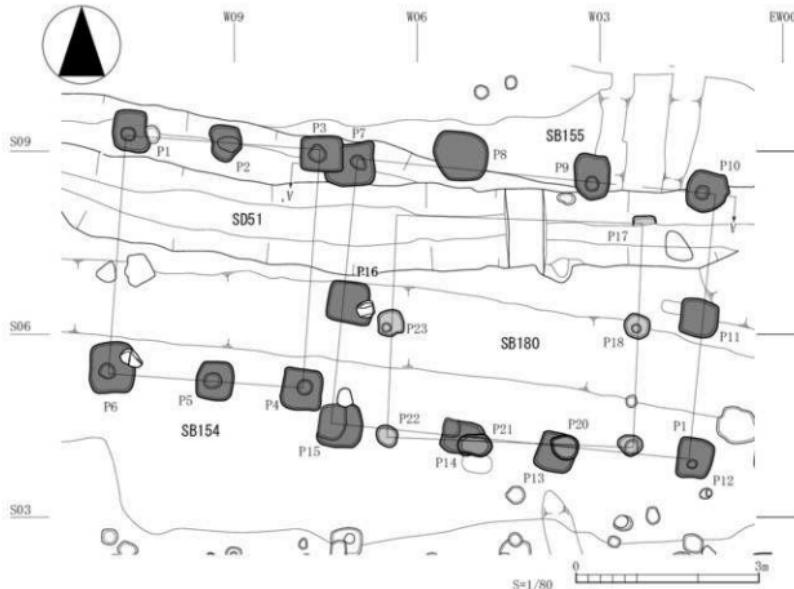
【柱痕跡・抜取り穴の有無】柱穴は 6 基（P 1～6）検出しており、P 2 で柱抜取り穴、それ以外の柱穴で柱痕跡を確認した。

【重複】S B 155 と重複し、それよりも新しい。

【方向・規模】方向は桁行（南側柱列）で測ると西で 4 度 5 分北に偏している。建物の規模は桁行が西側柱列で 3.88 m、梁行は南側柱列で総長 3.25 m、柱間は西から 1.73 m、1.52 m である。

【掘方】平面形は方形を基調とし、規模は南西隅柱穴（P 6）で測ると、長辺 85 cm、短辺 75 cm、深さ 24 cm である。埋土は灰黄褐色（10YR4/2）または黒褐色土（10YR3/2）を主体とし、浅黄色の粘質土が小ブロック状に混入している。

【柱痕跡】直径 22 ~ 25 cm の円形であり、埋土は黒褐色土である。



第 12 図 SB154・155・180 ほか平面図

【柱抜取り穴】 北妻棟通柱穴（P 2）の中央部で確認した。埋土は、浅黄色粘質土が斑状に混入する黒褐色土（10YR2/3）や暗褐色土（10YR3/3）である。

S B 155 堀立柱建物跡（第 12・13 図）

【位置】 調査区中央部、S 09 ~ 12、E W 00 ~ 06 付近で発見した。

【桁行・梁行】 桁行 3 間、梁行 2 間の東西棟建物跡である。

【柱痕跡・抜取り穴の有無】 柱穴は 10 基（P 7 ~ 16）検出しており、P 7・9・10・12 で柱痕跡、P 14・15 で柱抜取り穴を確認した。

【重複】 S B 154・180、SD 51 と重複し、それよりも古い。

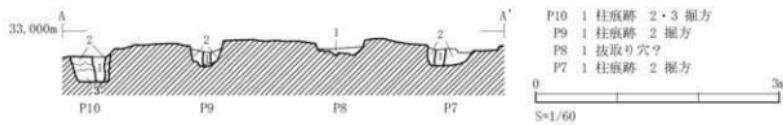
【方向・規模】 方向は南側柱列で測ると西で 5 度 10 分北に偏している。建物の規模は桁行が北側柱列で総長 5.67 m、柱間は西から約 1.7 m、約 2.1 m、1.87 m である。梁行は西妻で総長 4.3 m、柱間は北から約 2.3 m、約 2.0 m である。

【掘方】 平面形は方形を基調とし、規模は南西隅柱穴（P 15）で測ると、1 辺約 70 cm、深さ 40 cm である。埋土はにぶい黄褐色土（10YR4/3）や暗褐色土（10YR3/4）が主体であり浅黄色の粘質土や橙色土（7.5YR6/6）がブロック状に多く混入している。

【柱痕跡】 直径 14 ~ 20 cm の円形であり、埋土はにぶい黄褐色及び暗褐色土である。

【柱抜取り穴】 P 14・15 ともに柱穴西側で確認した。埋土はにぶい黄褐色土（10YR4/3）であり、明赤褐色土や黄橙色土が粒状に混入している。

【遺物】 堀方埋土から、須恵器蓋が出土している。



第 13 図 SB155 断面図

S B 156 堀立柱建物跡（第 14・15 図）

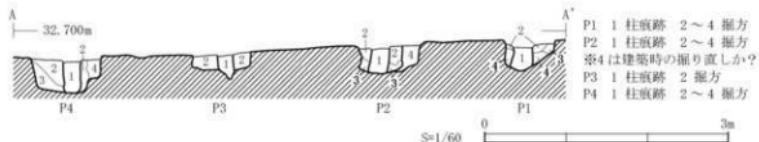
【位置】 調査区中央部、S 15 ~ 18、E W 00 ~ E 06 付近で発見した。

【桁行・梁行】 桁行 3 間、梁行 2 間の東西棟建物跡である。

【柱痕跡・抜取り穴の有無】 柱穴は 10 基（P 1 ~ 10）検出しており、すべての柱穴で柱痕跡を確認した。

【重複】 S B 158 と重複し、それよりも新しい。

【方向・規模】 方向は北側柱列で測ると西で 2 度 4 分北に偏している。建物の規模は桁行が北側柱列で総長約 5.50 m、柱間は西から 1.74m、1.86 m、1.90 m である。梁行は東側柱列で総長 4.46 m、柱間は北から 2.20 m、2.26 m である。



第 14 図 SB156 断面図

【掘方】 平面形は方形を基調とし、規模は北東隅柱穴（P 4）で測ると、長辺 85 cm、短辺 70 cm、深さ 48 cm である。埋土は褐色土（10YR4/4）、にぶい黄褐色土（10YR5/4）、明褐色土（7.5YR5/6）が主体であり、浅黄色土が粒状に混入している。

【柱痕跡】 直径 15 ~ 24 cm の円形であり、埋土は褐色土（10YR4/4）やにぶい黄褐色土（10YR5/4）である。

【遺物】 掘方埋土から、須恵器蓋が出土している。

S B 157 捜立柱建物跡（第 15 図）

【位置】 調査区中央部、S 15 ~ 18、E 06 付近で発見した。

【桁行・梁行】 梁行 2 間の東西棟建物跡と考えられる。

【柱痕跡・抜取り穴の有無】 柱穴は梁行（西妻）で 3 基（P 11 ~ 13）を検出しており、P 12・13 で柱痕跡、P 11 であたり痕跡のある柱抜取り穴を確認した。

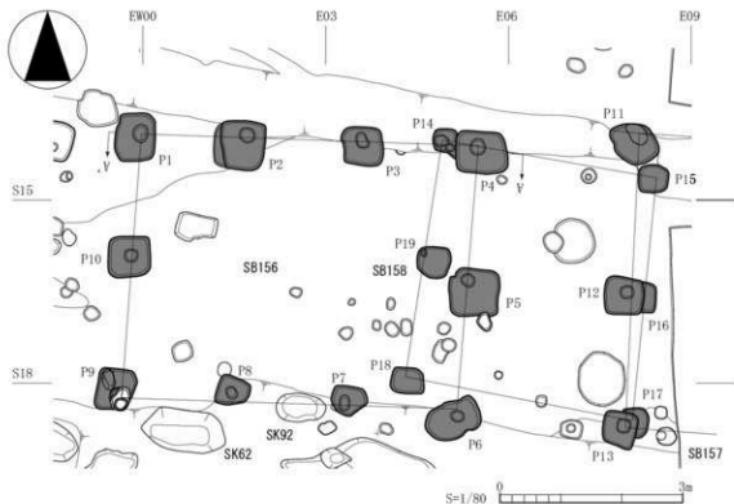
【重複】 S B 158 と重複し、それよりも新しい。

【方向・規模】 方向は北で約 2 度東に偏している。梁行は総長約 4.74 m、柱間は北から 2.54 m、2.20 m である。

【掘方】 平面形は方形を基調とし、規模は棟通り下柱穴（P 12）で測ると、1 辺約 60 cm、深さ 48 cm である。埋土は黄褐色土（10YR5/6）や褐色土（10YR4/6）が主体であり、にぶい黄褐色土（10YR4/4）や灰白色土がブロック状に混入しているほか、炭化物が粒状に認められる。

【柱痕跡】 直径 20 ~ 22 cm の円形であり、埋土はにぶい黄褐色土（10YR4/3）である。

【柱抜取り穴】 柱穴の北側から掘り込まれており、南側であたり痕跡を確認した。埋土は炭化物が混入するにぶい黄褐色土（10YR4/3）である。



第 15 図 SB156・157・158 ほか平面図

S B 158 挖立柱建物跡（第15図）

【位置】調査区中央部、S 15～18、E 06付近で発見した。

【桁行・梁行】桁行2間、梁行1間の南北棟建物跡である。

【柱痕跡・抜取り穴の有無】柱穴は6基（P 14～19）検出しており、P 14・19で柱痕跡を確認した。

【重複】S B 156・157と重複し、それらよりも古い。

【方向・規模】方向は西妻で測ると北で約8度東に偏している。建物の規模は桁行が西側柱列で総長約4.0m、柱間は北から約2.0m、約2.0mである。梁行は北妻で約3.5mである。

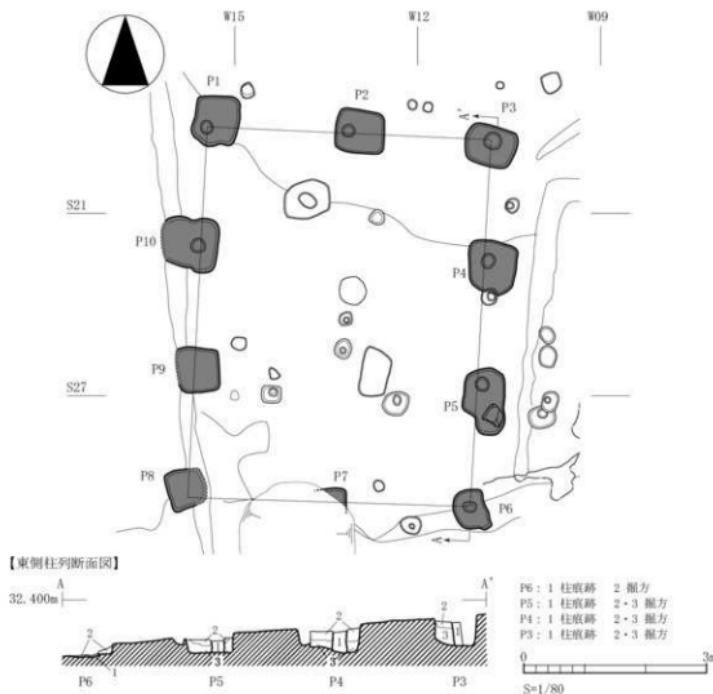
【掘方】平面形は方形を基調とし、規模は南西隅柱穴（P 18）で測ると、長辺50cm、短辺40cm、深さ30cmである。埋土はにぶい黄褐色土（10YR5/4）や暗褐色土（10YR4/4）が主体であり、灰白色粘質土がブロック状に混入しているほか、炭化物粒も認められる。

【柱痕跡】直径18cmの円形であり、埋土はにぶい黄褐色土（10YR4/3）である。

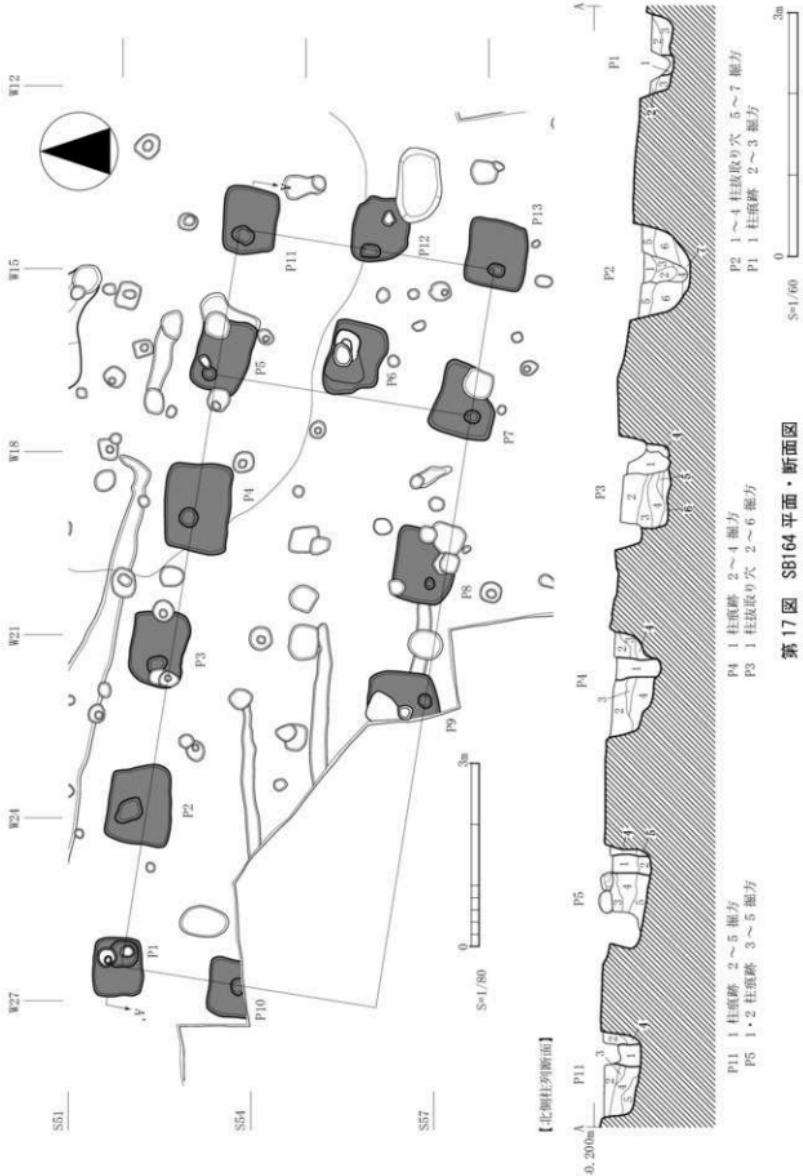
S B 159 挖立柱建物跡（第16図）

【位置】調査区中央部、S 18～30、W 09～15付近で発見した。

【桁行・梁行】桁行3間、梁行2間の南北棟建物跡である。



第16図 S B 159 平面・断面図



第17图 SB164平面·断面图

【柱痕跡・抜取り穴の有無】柱穴は10基（P 1～10）検出しており、P 1～6・10で柱痕跡を確認した。

【重複】S B 181・183と重複するが、直接的な新旧関係は確認できない。

【方向・規模】方向は東側柱列で測ると北で3度28分東に偏している。建物の規模は桁行が東側柱列で総長6.02m、柱間は北から1.98m、2.02m、2.02mである。梁行は北側柱列で総長4.68m、柱間は西から2.30m、2.30mである。

【掘方】平面形は方形を基調とし、規模は北妻棟通り下柱穴（P 2）で測ると、長辺80cm、短辺70cm、深さ46cmである。埋土は褐色土（10YR4/6・4/4）または暗褐色土（10YR3/3）が主体であり、地山ブロックや粘質土ブロックが多く混入している。

【柱痕跡】直径20～30cmの円形であり、埋土は暗褐色土（10YR3/3）である。

【柱痕跡】直径14～28cmの円形であり、埋土は灰黄褐色土（10YR4/2）である。

S B 164 堀立柱建物跡（第17図）

【位置】調査区南部、S 51～57、W 12～27付近で発見した。

【桁行・梁行】桁行4間、梁行2間の東西棟建物跡であり、東側に1間分の廊が取り付く。

【柱痕跡・抜取り穴の有無】柱穴は13基（P 1～13）検出しており、P 1・4・5・7～13で柱痕跡、その他の柱穴で柱抜取り穴を確認した。

【重複】S B 196・198と重複するが、直接的な新旧関係は不明である。

【方向・規模】方向は北側柱列で測ると西で9度0分北に偏している。建物の規模は身舎北側柱列で測ると桁行が北側柱列で総長9.65m、柱間は西から約2.4m、約2.4m、2.42m、2.43mである。梁行は東側柱列で総長4.38m、柱間は北から約2.3m、約2.1mである。また、東側の廊の出は2.41mである。

【掘方】平面形は方形を基調とし、規模はもっとも大規模な北側柱列西から3間目柱穴（P 4）で測ると、長辺150cm、短辺110cm、深さ68cmである。埋土は黄褐色土（10YR5/6）や褐色土（10YR4/4）が主体であり、黒褐色土（10YR3/2）が小ブロック状または斑状に多く混入している。

【柱痕跡】直径24～28cmの円形である。埋土は黒褐色土（10YR3/2）であり、褐色土（10YR4/4）や炭化物粒が若干混入している。

【柱抜取り穴】P 2・3で確認した。平面では柱痕跡状に認められるが、埋土の状況や断面の形状から柱抜取り穴と判断した。埋土は黒褐色土（10YR3/2）が主体であるが、褐色土が多く混入している。

S B 169 堀立柱建物跡（第18図）

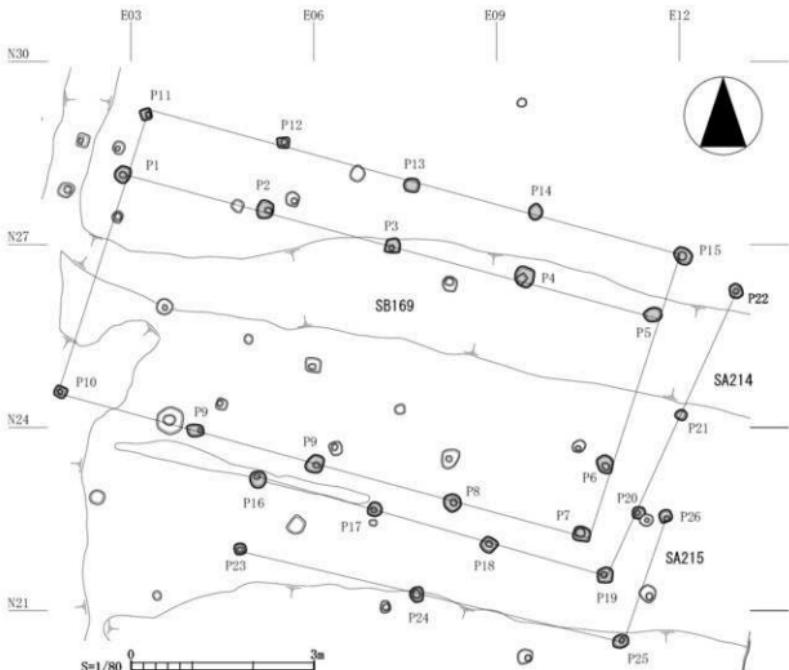
【位置】調査区北部、N 21～30、EW 03～12付近で発見した。

【桁行・梁行】桁行4間、梁行1間の東西棟建物跡であり、北側に1間分の廊が取り付く。

【柱痕跡・抜取り穴の有無】柱穴は15基（P 9～16）検出しており、P 1～4・6・8～13・15で柱痕跡確認した。

【方向・規模】方向は南側柱列で測ると西で約15度北に偏している。建物の規模は身舎南側柱列で測ると桁行が総長約8.8m、柱間は西から2.38m、2.00m、2.35m、約2.1mである。梁行は東側柱列で約3.8m（2間分）であり、南東隅柱穴より北側約1.2mの位置にも柱が設けられている。北側柱列の廊の出は1～1.08mである。

【掘方】平面形は方形または横円形を基調とし、規模は北西隅柱穴（P 1）で測ると、直径25cm、深さ20cmである。埋土は明黄褐色土（10YR6/8）や黄褐色土（10Y5/6）、褐色粘質土（7.5YR4/6）が主体であり、



第18図 SB169 ほか平面図

浅黄色の粘質土が小ブロック状に多く混入している。

【柱痕跡】直径8～12cmの円形であり、埋土は粘性のある暗褐色土(10YR3/4)である。

S B 170 挖立柱建物跡 (第19図)

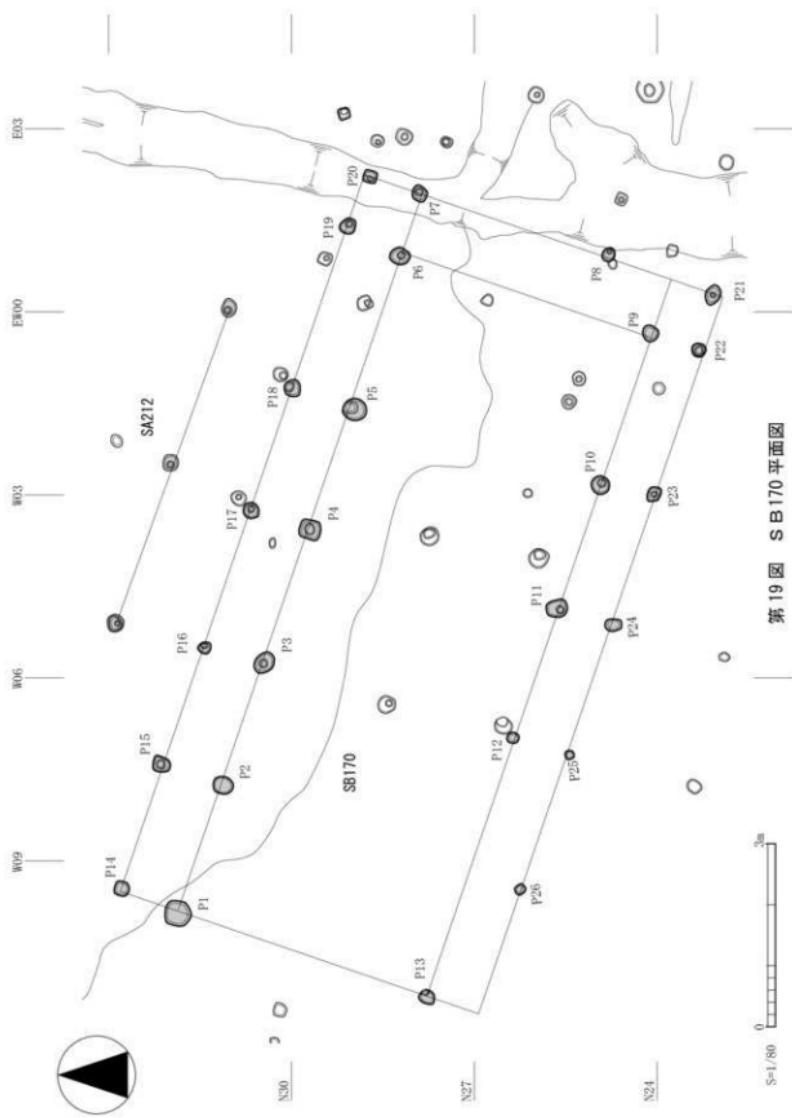
【位置】調査区北部、N 24～33、E 03～W 09付近で発見した。

【桁行・梁行】桁行5間、梁行1間の東西棟建物跡であり、西側を除く各側柱に1間分の庇が取り付く。

【柱痕跡・抜取り穴の有無】柱穴は26基(P1～26)検出しており、P3～8・10・11・15～23で柱痕跡を確認した。

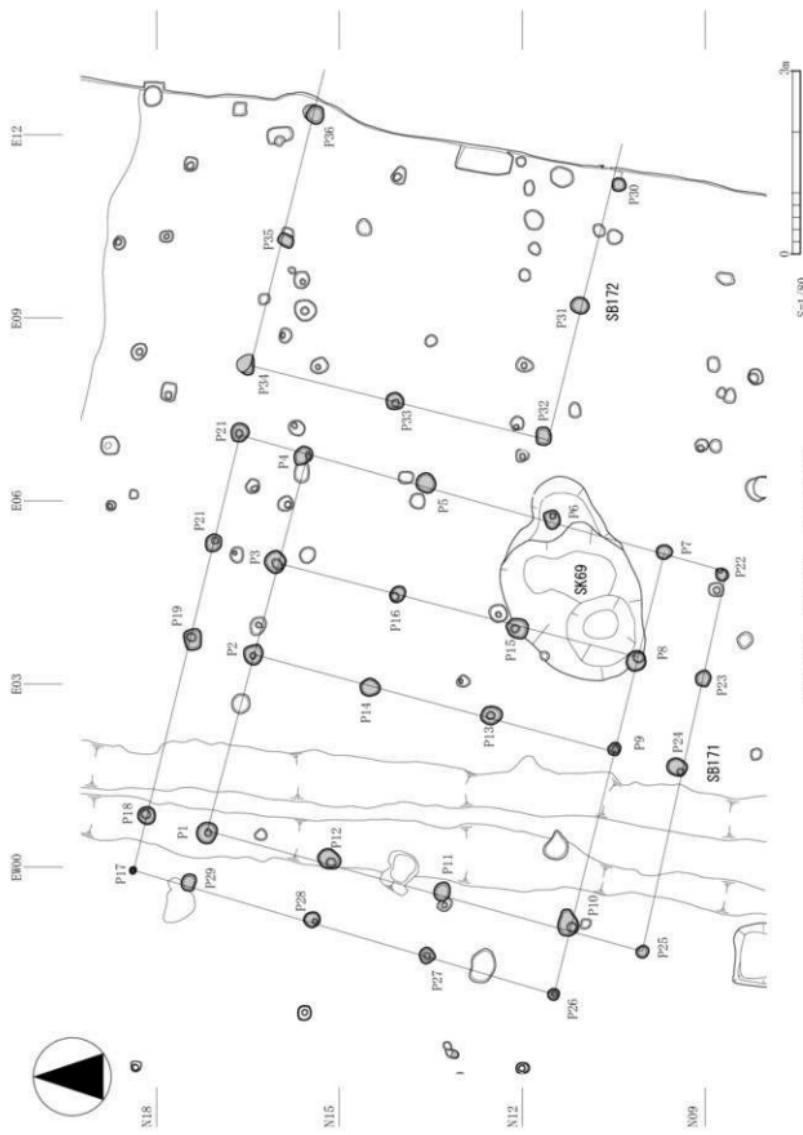
【方向・規模】方向は南側柱列で測ると西で約19度北に偏している。建物の規模は身舎北側柱列で測ると桁行が総長約11.4m、柱間は西から約2.2m、約2.1m、2.32m、2.13m、2.64mである。梁行は東側柱列で約4.4m(2間分)である。各側柱からの庇の出は、北側で約1m、東側で1～1.1m、南側で約0.9mである。

【掘方】平面形は方形または梢円形を基調とし、規模は身舎北西隅柱穴(P1)で測ると、直径40cm、深さ40cmである。埋土は黄褐色土(10YR5/6)が主体であり、浅黄色の粘質土が小ブロック状に多く混入しているほか、僅かに炭化物粒も認められる。



第19圖 SB170平面圖

第20図 SB171・172平面図



【柱痕跡】直径 10 ~ 14 cm の円形であり、埋土は粘性のある暗褐色土 (10YR3/4) である。

S B 171 堀立柱建物跡 (第 20 図)

【位置】調査区北部、N 09 ~ 18、EW 00 ~ W 09 付近で発見した。

【桁行・梁行】桁行 3 間、梁行 3 間の東西棟建物跡であり、東側を除く各側柱に 1 間分の廂が取り付く。身舎内は西半部が東西 2 間分の広い空間を有しているのに対して、東半部は総柱となっている。

【柱痕跡・抜取り穴の有無】柱穴は 29 基 (P 1 ~ 29) 検出しており、P 1 ~ 4・6・8 ~ 10・12・13・15・16・18 ~ 22・24・26 ~ 28 で柱痕跡を確認した。

【方向・規模】方向は北側柱列で測ると西で約 15 度北に偏っている。建物の規模は身舎北側柱列で測ると桁行が総長 6.39 m、柱間は西から 2.99 m、1.55 m、1.85 m である。梁行は西側柱列で総長 6.18 m、柱間は北から 2.09 m、約 1.9 m、約 2.2 m である。各側柱からの廂の出は、北側で 1.05 ~ 1.15 m、南側で 1 ~ 1.3 m、西側で 0.9 ~ 1.15 m である。

【掘方】平面形は方形または楕円形を基調とし、規模は身舎北西隅柱穴 (P 1) で測ると、直径 35 cm、深さ 40 cm である。埋土は明黄褐色土 (10YR7/6) や明褐色 (7.5Y5/6・5/8) が主体であり、浅黄色の粘質土が小ブロック状に多く混入している。

【柱痕跡】直径 8 ~ 14 cm の円形であり、埋土は粘性のある暗褐色土 (10YR3/4) またはにぶい褐色 (7.5YR5/4) である。

S K 57 土壙 (第 21 図)

【位置】調査区中央部、S 15、W 12 ~ 15 付近で発見した。

【重複】他の遺構との重複はない。

【平面形・規模】東西にやや長い、不整形の土壙である。規模は東西約 3 m、南北最大 2 m、深さは約 20 cm である。

【壁・底面】壁は非常に緩やかに立ち上がっている。底面は起伏が著しく、南に向かって低くなっている。

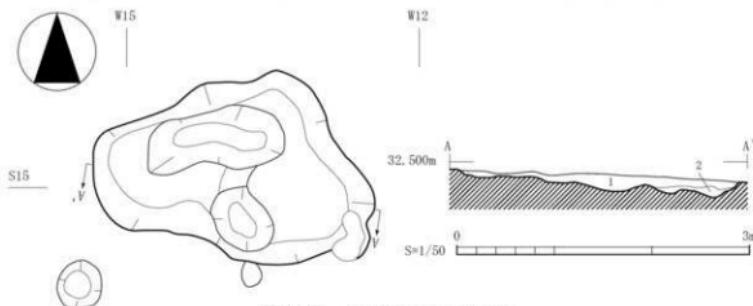
【遺物】土師器壺 (B I・B II・B II C 類)・甕 (A 類)、須恵器壺 (III・V 類)・高台付杯が出土している。

S X 54 石敷遺構 (第 22 図)

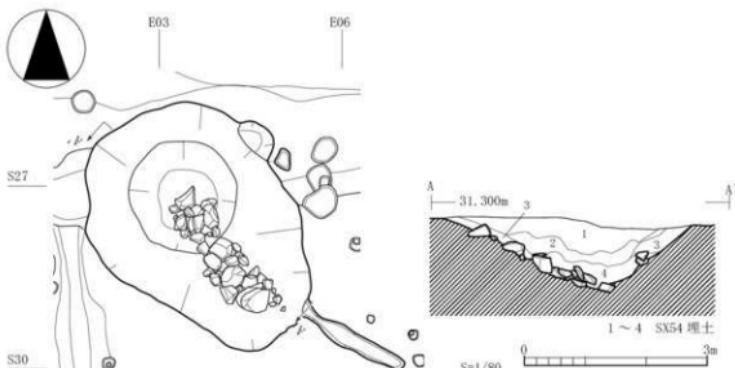
【位置】調査区南部、S 27 ~ 30、E 03 ~ 06 付近で発見した。

【重複】他の遺構との重複はない。

【平面形・規模】南北に長い楕円形の土壙南東隅に、南北方向の溝が取り付く。土壙の規模は南北 4.4 m、



第 21 図 SK 57 平面・断面図



第22図 S X54 石敷遺構平面・断面図

東西3m、深さは約1.1mである。南北方向の溝は長さ1.9m、幅14~32cmである。

【壁・底面】壁は中央から北側中位付近かけて段が設けられており、下方がやや急角度に、上方が非常に緩やかに立ち上がっている。底面はやや丸みを帯びて窪んでいる。また、長径中軸付近には、南端から中央底面にかけて石敷きの階段状施設が設けられている。石敷きの範囲は長さ2.4m、幅0.7mである。

【遺物】古瀬戸後期様式の天目茶碗が出土している。

S X 121 性格不明遺構（第23図）

【位置】調査区南部、S 30~33、W 24付近で発見した。

【重複】SB 191と重複するが、直接的な新旧関係は確認できない。

【平面形・規模】東西に長い方形の土壌南東隅に、南北方向の溝が取り付いている。土壌の規模は東西1.7m、南北1.3m、深さは西半部が4cm、東半部が24cmである。南北方向の溝は長さ1.8m、幅18~30cmである。

【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がっており、底面はおよそ平坦である。なお、西半部の底面中央で焼け面を確認した。

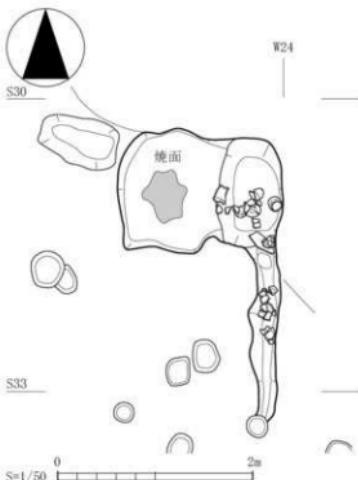
【遺物】土師器甕（B類）、多口瓶、須恵器壺（V類）、須恵系土器壺・高台付杯が出土している。このうち多口瓶は、外面ヘラミガキ後黒色処理が施されている。

S D 51 溝跡（第24図）

【位置】調査区中央部、S 09、W 18~E 09付近で発見した東西方向の溝跡である。

【重複】SB 154・155・180、SK 73と重複し、それより新しい。

【方向・規模】およそ西で3度北に偏している。規模は

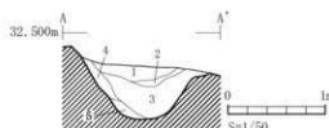


第23図 S X121 平面図

長さ 25.6 m 以上、上幅約 1.3 m、下幅 0.25 ~ 0.6 m、深さは東端部で 0.8 m である。

【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がっており、底面は丸みを帯びて隆んでいる。東西の比高は標高地で測ると 48 cm であり、東側に向かって傾斜している。

【遺物】瓦質土器鉢、茶白が出土している。



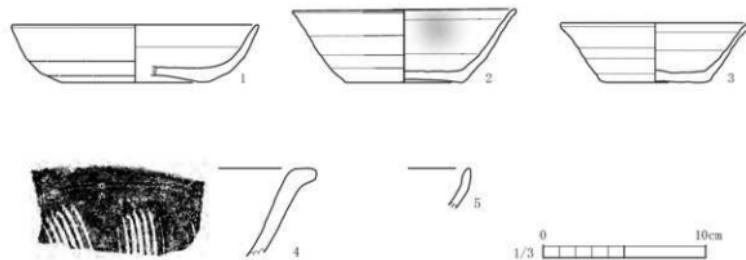
第 24 図 SD51 断面図

4まとめ

(1) 遺構の年代

今回の調査では、竪穴住居跡 3 軒、掘立柱建物跡 46 棟のほか、多数の土塙や溝跡、柱穴を発見した。このうち、竪穴住居跡と掘立柱建物跡の重複関係については、S I 141 → S B 152、S I 142 → S B 181、S I 143 → S B 188 など、いずれも掘立柱建物跡が竪穴住居跡よりも新しいことが明らかである。一方、掘立柱建物跡は、一辺 60 cm 以上の方形主体の掘方のものと (a 群)、直径 30 ~ 40 cm ほどの方形または梢円形主体の掘方のもの (b 群) の 2 種類に大別することができる。これら建物跡の重複関係をみると、S B 152 (a 群) → S B 177 (b 群) S B 155 (a 群) → S B 180 (b 群)、S B 196 (a 群) → S B 196・198 (b 群) であり、a 群 → b 群の新旧関係が確認できる。

次に、竪穴住居跡から出土した遺物を見ると、S I 142 では周溝に多数の瓦が敷設されており、平瓦 IA 類 1 点、II B a 類 13 点 (A a タイプ 1 が 9 点、B a タイプ 2 が 4 点)、II B b 類 2 点、丸瓦 II b 類 a タイプ 15 点が確認できる。土器類では、周溝から須恵器坏 III 類 2 点、住居内埋土から土師器坏 B II 類 1 点、



番号	種類	遺構 層位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	写真 図版	登録 番号	備考
			外 面	内 面					
1	須恵器 坏	S I 142 住居内埋土	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ	(15.1) 9/24	(8.2) 8/24	—	R90	V 類
2	須恵器 坏	S I 143 住居内埋土	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ	13.6 22/24	7.2 24/24	—	R22	V 類、油煙付着
3	須恵器 坏	S I 143 住居内埋土	ロクロナデ 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(11.6) 3/24	6.6 24/24	—	R22	III 類
4	瓦質土器 鉢	SD51・1 層	ロクロナデ	鉢目	—	—	—	R89	
5	茎輪陶器 天目茶碗	SK54・1 層	鉢袖	鉢袖	—	—	2-2	R88	

第 25 図 各遺構出土遺物

須恵器壺II類1点、V類1点がある。平瓦にII B b類があることから、政庁III期以降と考えられる。出土した土器も土師器壺にB類が含まれていることから8世紀後葉以降のものであり、瓦の年代と矛盾するものではない。

S I 143では、主柱穴掘方から土師器壺B II類1点、周溝から土師器壺B II類2点、土壤4から土師器壺B V類1点、住居内埋土から土師器壺B II類2点、B V類1点、土師器甕A類1点、土師器甕B類1点、須恵器壺III類5点、V類1点、平瓦I A類1点、II B類3点が出土している。点数は少ないものの、土師器では再調整が施されたものが約7割、須恵器ではIII類が8割以上を占めていることや、1点のみではあるが土師器甕A類が混在している状況は、市川橋遺跡S X 1351 C・D期や同遺跡SD 1522出土土器群と類似しており、およそ9世紀前葉から中葉頃のものと考えられる。

S I 141ではB期床面から土師器甕A類2点、住居内埋土から土師器甕A類1点、須恵器壺II a類2点が出土している。出土点数は非常に少いものの、土師器甕B類が認められないことを考慮すれば、8世紀後葉まで下らない可能性もある。

掘立柱建物跡a群については出土遺物がほとんどなく年代については明らかではないが、同様の建物跡は古代に多く認められるものである。このうち、S B 152はS I 141との重複関係から8世紀後葉～9世紀初頭頃を上限と捉えることができ、今回発見した建物跡a群の年代の一端を示すものと考えられる。また、建物跡a群には、S B 155→S B 154、S B 158→S B 156、S B 161→S B 160などの新旧関係があり、少なくとも2小期に細分することができる。一方、調査区西端部で確認したS X 121では須恵系土器壺が7点出土している。10世紀後半以降に出現するとされている小型壺・皿が確認されないものの、市川橋遺跡SK 565土壤（多賀城市教育委員会1993）に認められるような小型の塊状の壺（写真図版2-3）が出土しており、10世紀中葉頃のものと考えられる。今回発見した古代の遺構群の中では最も新しく、上述した建物跡a群の中にもこの頃まで下るもののが存在する可能性もある。S K 57からは土師器壺B I類2点、B II類2点、B II C類1点、土師器甕A類1点、須恵器壺III類3点、V類3点が出土している。土師器壺では再調整が施されるものに限られることや甕A類が認められること、須恵器壺ではIII・V類が同数であることから、8世紀後葉～9世紀前葉頃の土器群の範疇におさまるものと考えられる。

掘立柱建物跡b群もa群同様出土遺物がなく、年代については明らかではない。柱穴の規模は30～40cmと小さく、平面形は方形または梢円形を基調としている。このような柱穴は、本市内の遺跡では中・近世以降の建物跡に多く認められるものである。近世以降の出土遺物がほとんどないことから、およそ中世の範疇に収まるものと考えておきたい。一方、今次調査で出土した中世の遺物を見ると、SD 51から東北南部でA類とされている瓦質土器擂鉢（高桑2003）や茶臼、S X 54から古瀬戸窯後期様式の編年（藤沢2008）でIII期のものと口縁形体が近似する天目茶碗がある。瓦質土器擂鉢は15世紀、天目茶碗は15世紀前半頃のものであることを考慮すれば、建物跡b群の年代もおよそ同時期またはそれ以降と捉えておきたい。

（2）各時期の様相

上述したように、今回発見した遺構は8世後葉～10世紀前葉頃の古代のものと、15世紀以降の中世のものに大別することができた。ここでは、前者をI期、後者をII期とし、各時期の様相についてまとめる。

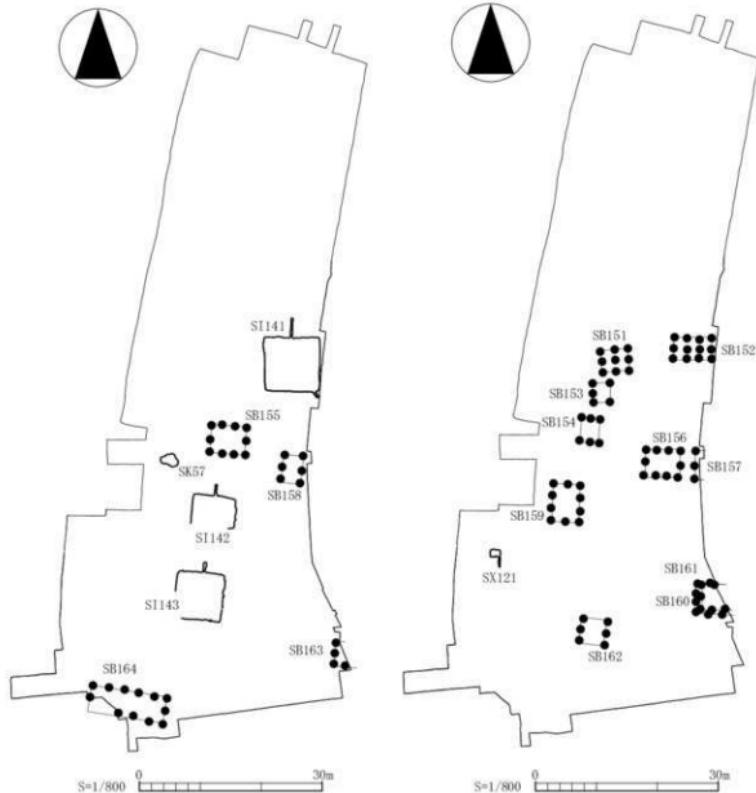
【I期】（第26・27図）

堅穴住跡4軒と掘立柱建物跡a群13棟が建設される時期である。S I 141→S B 152の重複関係より、

竪穴住居跡→掘立柱建物跡a群の変遷も考えられるが、後述するように竪穴住居と近似した方位を取る建物跡もあることから、両者が同時存在していた時期も想定される。これら遺構群は、調査対象となった丘陵の中央から南側に展開しており、北側では同時期のものは確認できない。

竪穴住居跡は、発掘基準線と方向がおよそ一致するものが2軒（S I 141・144）、北で東に傾くものが2軒（S I 142・143）ある。このうち、S I 142・143は東辺をおよそ揃えて設けられていることから、同時に存在した可能性が高い。出土した遺物もS I 142が8世紀後葉以降、S I 143が9世紀前葉から中葉頃であることから、年代的にも矛盾するものではない。のことから、竪穴住居跡は中央部のS I 144・141が8世紀代に先行して設けられ、廃絶後の8世紀後葉～9世紀前葉頃にS I 142・143が機能していたものと考えられる。

建物跡は、発掘基準線と一致するものが2棟（S B 152・153）、北で西に傾くものが1棟（S B 151）、それ以外は全て北で東に傾くものである。東に傾く建物跡のなかには、北で東に6～8度傾くS I 142・



第26図 IA・B期（古代）遺構模式図

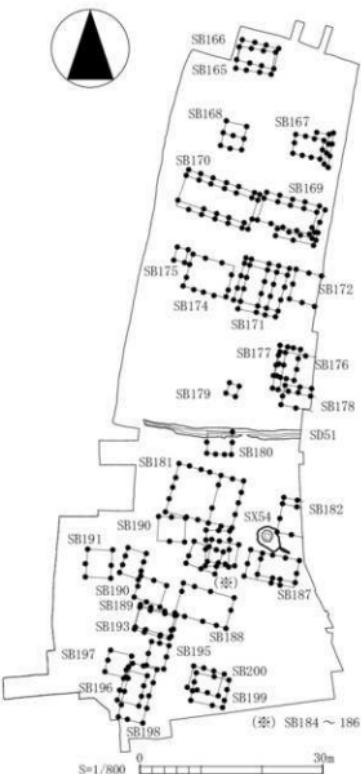
第27図 IC期（古代）遺構模式図

143と近似した方位を示すものが4棟あり（北で5～9度東に傾くもの：SB 155・158・163・164）、このうちSB 155・158は建物跡a群内の新旧関係では最も古いものである。傾きが近似する点を重視すれば、これら建物跡はS I 142・143と同時期に存在していたものと捉えておきたい。一方、新旧関係でこれら建物跡よりも新しいSB 154・156・157は北で2～4度東に傾くものであり、古い建物群よりも南北を意識している傾向が認められる。SB 151～153・159～161も近似した値を示していることから、これらは建物跡a群の中では後出的な建物跡と考えられる。

【Ⅱ期】(第28図)

掘立柱建物跡b群33棟と、溝跡、石敷き遺構がある。中央部のSD 51を境に、建物跡が規則的に配置され建て替えがさほど認められない北側の区画と、何度も建て替えが行われている南側の区画に大別できる。建物として組み合わせることができない柱穴も南側の区画が圧倒的に多く、南東部を除き建物の重複関係がない北側の区画とは対照的である。

一方、両区画の建物跡は北で東に10～20度前後傾くものがほとんどであり、方向に統一性が認められることから、両区画は同時期に機能していたものと考えている。しかし、廂や間仕切りと考えられる柱を据え、扉を設けるものが多く確認される北側の区画に対して、南側の区画は北側よりもやや小規模な側柱の建物が主体となっており、南北で階層差が存在していた可能性も指摘できよう。



第28図 Ⅱ期（中世）遺構模式図

【参考文献】

高桑弘美「瓦質土器」「中世奥羽の土器・陶磁器」2003

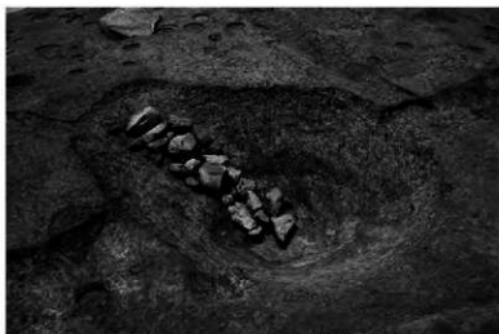
藤沢良祐「中世瀬戸窯の研究」2008

多賀城市教育委員会「市川橋道路ほか」多賀城市文化財調査報告書第35集 1994

多賀城市教育委員会「市川橋道路一城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書II」多賀城市文化財調査報告書第70集 2003



調査区中央付近（南より）



S X 54 石敷遺構（北東より）



S X 121 性格不明遺構（北より）



土師器多口瓶 (S X 121)



天目茶碗 (S X 54)



須恵系土器坏 (S X 121)



須恵系土器坏 (S X 121)



平瓦・刻印「物」(S I 142 出土)



丸瓦・刻印「田」(S I 142 出土)

報告書抄録

ふりがな 書名	たがじょうしないのいせき 1 多賀城市内の遺跡 1						
副書名	西沢遺跡第2次調査の概報						
シリーズ名	多賀城市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第134集						
編著者名	武田健市						
編集機関	多賀城市埋蔵文化財調査センター						
所在地	〒985-0873 宮城県多賀城市中央二丁目27-1 Tel: 022-368-0134						
発行年月日	西暦2017年3月24日						
所収遺跡名	所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
西沢遺跡 (第24次)	宮城県多賀城市 洋平字西沢70、71、74、76番	04209 18017	38度 18分 28秒	140度 59分 39秒	19940425 ~ 19941221	3.735 m ²	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
西沢遺跡 (第2次)	集落	古代 中世	堅穴住居跡・掘立柱 建物跡・溝跡・土壙	土師器・須恵器・須恵系土 器 瓦・旋軸陶器・瓦質土器			
要約	<ul style="list-style-type: none"> 古代の堅穴住居跡、掘立柱建物跡などを発見した。これら遺構には、8世紀後葉以前、8世紀後葉～9世紀中葉頃、9世紀中葉～10世紀中葉頃の3時期の変遷があることを確認した。 中世では、屋敷跡を確認した。北の区画と南の区画があり、両区画には階層差があると想定した。 						

多賀城市文化財調査報告書第134集

多賀城市内の遺跡1

—西沢遺跡第2次調査の概報—

平成29年3月24日 発行

編集 多賀城市埋蔵文化財調査センター

多賀城市中央二丁目27番1号

電話(022)368-0134

発行 多賀城市教育委員会

多賀城市中央二丁目1番1号

電話(022)368-1141

印刷 今野印刷株式会社

仙台市若林区六丁の目西側12番10号

電話(022)288-6123